身近な「観察」対象

動物応用科学科４年　倉田直幸

このオブザベーションに何を書くべきかを考え、「観察」の原点に立ち戻ってみた。観察の対象は「チビ」、我が家で飼い始めておよそ13年になるミシシッピアカミミガメである。

水槽に代用している衣装ケースを覗き込むと、体長20cm強のチビがいた。尾の形状や総排泄口の位置から、我が家ではメスと判断されている。見ていると、エサの時間かと思ったのか、凄まじい勢いで水をかき始めた。しばらくして私にエサを与える意思がないと悟ったのか、四肢の動きを止め、ジッとこちらを睨むようになった。しばらく見つめ合う格好になり、ふと同じ研究室の山田君が「金華山でシカと話した」という話を思い出したが、私にその素養はなかったようである。

そのままの体勢で私はチビを飼い始めたころに思いをはせていた。「ミドリガメ1匹100円」。私はチビともう二人を買い求め、合計300円支払った。チビはその中で一番小さかったので「チビ」と名づけた。チビはその後みるみる成長し、現在に至るが、他の二人はチビの糧となり、天に召されてしまった。

麻布大学に入学し、さまざまな授業を受けていく中で、チビを見る目はただのペットから、研究対象(のようなもの)へと変わっていった。人間関係学の太田先生や行動学の田中先生の講義でアニマルウェルフェアについて勉強した後は、水槽のレイアウトに凝ってみたり、チビが幸せなのかどうか本気で考えてみたりした。もっとも私の作ったレイアウトはすぐに破壊されてしまったが。また繁殖学の柏崎先生の講義を受けた後はカメ類の繁殖について少し掘り下げて勉強したりした。

野生動物学研究室に入り、解剖や骨格標本製作に携わるようになってからは、「そういう対象」としてカメは非常に、非常に興味がある。末永く幸せに生きてほしいと願う自分もいる一方で、万が一死んでしまった場合は、遺体と氷をクーラーボックスに入れて横浜線に乗って、冷凍庫に保存しておいて、タヌキの解剖の時に場所を貸してもらって、完成したら「ヒバリちゃん」の横に置いてもらおう、という筋書きを完成させてしまった自分も確かに存在する。カメの骨格標本作りはぜひ実行し、完成させたいもののひとつである。